

## 自由研究発表

司会 佐藤 臨太郎 (奈良教育大学)

### 第2室

(5) 9:30 ~ 10:00 (6) 10:10 ~ 10:40  
(7) 10:50 ~ 11:20 (8) 11:30 ~ 12:00

### 第2室 (5)

#### 私の授業は自律的な学習者の育成を促したのか

川村 拓也 (北陸大学)

本研究は発表者が2年間に渡って英語の授業を担当した中学3年生にアンケートとインタビューを行うことで、発表者の授業が自律的な英語学習者の育成を促したのかを調査した実践研究である。発表者の研究当時の勤務校では、今年1月から2月にかけて約2週間のオンライン授業期間を設けた。そのオンライン授業期間中の学習状況に関するアンケートの結果と日頃の授業内外における関わりや課題の提出状況等から「自律的英語学習者」と判断された生徒のうち3名に、これまでの英語学習に関するインタビューを行った。

インタビューで語られた内容をもとに TEM (Trajectory Equifinality Model; 複線径路・等至点モデル) 図を作成し、生徒の人生における英語学習への取り組み方の変容を時系列的に整理するとともに、その変容に発表者の授業がどのように関与したのかを検討した。TEM とは等至点 (Equifinality Point; EFP) つまり研究者が関心を持つ状態 (今回の研究では「自律的英語学習者」) に至った人物を招き、そこに至るまでの人生の経緯をインタビューして図に表現する手法である。この手法では等至点に至る過程における様々な出来事や考え方の変化、行動の選択等を分岐点 (Bifurcation Point; BP) として整理する。また、分岐点において等至点に繋がる行動・選択等を促す社会的要因を社会的ガイド (Social Guidance; SG)、逆にそれを阻害するような社会的要因を社会的方向づけ (Social Direction; SD) として図に表すことで分岐の根拠や契機を可視化することができる。

多くの中学生にとって学校の英語の授業というのは普段の生活の中で英語に触れる場面のうちの一つに過ぎない。英会話教室に通ったり、家で英語の音楽を聴いたり、一人一人の学習者の英語との関わり方は様々である。本研究はそのことを強く念頭に置き、発表者の授業そのものに焦点を当て過ぎないように、学習者の英語学習への取り組みの変化の過程を丁寧に追いながら、英語の授業がそこに SG あるいは SD としてどのように影響を及ぼしたのかを整理する。

### 第2室 (6)

SNS X

#### HSP の可能性がある学生が英語の授業中に何を感じ、どのような影響があるのか

中島 藍 (京都大学大学院生)

本発表では、愛知県のトップ高校に通っていた学生にインタビューをおこない、HSP の可能性がある学生が英語の授業中に何を感じ、どのような影響があるのかということを報告する。そ

の学生は Highly Sensitive Person Scale 日本版 (HSPS-J19) において HSP の可能性が極めて高いことが確認された。インタビューは合計7回、7時間の半構造化面接をおこない、その中から得られたインタビューデータを、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析をおこなった。その結果、HSP の可能性がある学生は、教室内外の様子や教師の機嫌などの『気になること』や、周りの生徒の雰囲気や教科書の内容などの『圧倒されたこと』により思考がそれてしまい授業に集中できない。また、教師の威圧的な態度や中学校から高校への様々な変化により、『外国語不安』や『変化による混乱』が生まれていた。その結果、自分はダメな人間であるという自己否定をしてしまい、その自己否定は今もなお続いていることが明らかになった。一方、そのような環境下でも、音楽を聴いたり、漫画を読んだりすることで『現実逃避』を行い、気持ちを落ち着かせていたことが確認された。さらに『教師に求めること』として、英語は怖いものではなく楽しいものであることや中学校から高校でどのような変化があるか教えることなどが挙げられた。『集中しやすい内容』としても物語のようにストーリー性のあるものを扱ってほしいという考えが挙げられた。

## 第2室 (7)

## SNS X

## The Longitudinal Relationship Among the Four Language Skills and Vocabulary Knowledge of Japanese Junior High School Students

金本 英朗 (高岡市立志貴野中学校)・岡崎 浩幸 (富山大学)・石津 憲一郎 (富山大学)

The four language skills (listening, reading, speaking, and writing) and vocabulary knowledge are interrelated, and some studies demonstrate such correlations amongst them. Yet few studies have examined a longitudinal relationship among these five variables in a way which could explain how each variable contributes to improvement in others. This study examines how junior high school students' listening, reading, speaking, and writing skills, as well as vocabulary knowledge, affect each other over time.

One-hundred-twenty-five second-year junior high school students participated in the study. Their

English proficiency was assumed to be at the CEFR A1 level based on their test performance prior to this study. The students took tests at three approximately equal intervals of eight weeks, and their four skills and vocabulary knowledge were measured. The tests were designed to all have similar difficulty, with the questions differing for each test. In the analyses, first, correlations between the five variables were examined. Next, each variable was analyzed by a latent growth model (LGM) to find whether each skill had significant growth during the 16 week period. Last, the five variables were analyzed together by a multivariate latent growth model (MLGM) to investigate whether the initial score for each skill or vocabulary knowledge contributed to improvement in the other categories over the 16 weeks.

The analyses first revealed moderate to strong positive and significant correlations between the four skills and vocabulary knowledge. Second, all the LGM on each variable displayed significant growth during the period. Finally, the MLGM showed that the intercept of writing skill

had positive and significant effects on the slopes of listening skill and speaking skill respectively. The results suggested that having higher initial writing skill may contribute to improvement in listening and speaking skill over a short period. Thus, it might be useful to teach writing to enhance student's listening and speaking skills in junior high schools.

## 第2室 (8)

### クラスメートの英語力に対する学習者の認識が自己効力感に与える影響

土橋 祐太 (信州大学卒業生)・山本 大貴 (信州大学)

自己効力感の高さに影響を与える要因として著名なものには、Bandura (1997) が挙げた「達成経験」「社会的説得」「代理体験」「生理・感情的状態」の4つがある。しかし、それら以外にも自己効力感に影響を与える要因は多数あると考えられる。本研究では「井の中の蛙効果」(Marsh, 1987) を基に、「周囲の学習者の英語力に対する認識」(周囲の学習者の英語力が自分の英語力より高いと感じるか、低いと感じるか) もその要因の1つであるという仮説を立て、質問紙調査により量的に検証した。

参加者は、A 大学で必修英語の授業を履修する2年次の学生117名である。A 大学の英語の授業は、TOEIC の点数を基に、「上級」「中級」「初級」の3つのクラスにレベル分けされている。本研究では、「自分の英語力はクラスの中で下位に位置する」と認識している上級クラス(以下、「上級下位」)の学生よりも、「自分の英語力はクラスの中で上(中)位に位置する」と認識している中級クラス(以下、「中級上位」)の学生の方が高い自己効力感を持っている場合、仮説が支持されたとみなすこととした。自己効力感は、授業内の自己効力感(e.g., 「私はこの英語の授業内での発表(プレゼン)で上手く話せると思う。」)と、より一般的な自己効力感(e.g., 「私の英語の話す能力は優れていると思う。」)にわけて分析を行った。さらに、上述した Bandura (1997) の4つの要因と、「クラスメートの英語力に対する認識」が、自身の自己効力感にどの程度影響を与えると思うか尋ねた。

分析の結果、中級上位の学生の授業内の自己効力感は、上級下位の学生よりも高くなった。効果量(d)は中程度であった。一方で、一般的な自己効力感においても差があるかについては、本研究では結論が出なかった。また参加者は、「クラスメートの英語力に対する認識」は、「代理体験」「生理・感情的状態」よりも自身の自己効力感に強い影響を与えていることも分かった。